

北海道で活躍したイタリアの登山家
フォスコ・マラーニ

高澤 光雄

「日本山岳文化学会論集」第15号 P.151～160

日本山岳文化学会

2017年11月

研究ノート

北海道で活躍したイタリアの登山家
フォスコ・マライーニ

Fosco Maraini, Italian mountaineer who played an important role in Hokkaido

高澤 光雄 TAKAZAWA Mitsuoⁱ⁾日本山岳文化学会文学・芸術分科会、登山家研究分科会
日本山岳会、日本山書の会、深田クラブ、札幌山の会

はじめに

フォスコ・マライーニは学生時代から登山に熱中、イタリア・アルプスでの登山記録を持ち、スキーの達人で、札幌へは自前のスキーを持参している。

1940年1月5日、北大山岳部日高山脈ベテガリ岳登山隊が、コイカクシュ札内沢で残念ながら8人が雪崩で遭難死亡した。この登山隊にマライーニも参加予定だったが、娘の病気のため行けず、病状が快方に向かったので3日後に札幌を出発。ベースキャンプへ向かい、尾根に登って何回も声を張り上げて呼んだが、何の応答もなかった。4日後に下山、その途中で北大の先輩・坂本直行と行き会い遭難事件を知る。

1940年2月4日の『北海タイムス』で、「冬の山岳征服にエスキモー雪小屋（イグルー）の実験、マライーニ君手稲山頂で成功」と報じている。

私が初めて会ったのは1967年3月、坂本直行の紹介で私の勤務先丸善（株）札幌支店に訪ねて来られた。用件は5年後の札幌冬季オリンピックでイタリア語のガイドブック作成で資料を探しているのだが、アイヌ関係の販売本が少なく、何とか探して欲しいとの事だった。折角の申し出なので私の貴重本20冊を翌日ご覧に入れ、大変喜ばれ全部欲しいと言われ譲渡した。その後も来札の都度面談していた。

1982年勲三等旭日中綬賞、1986年に国際交流基金賞を受賞され、1988年に日本山岳会名誉会員に推荐された。2004年6月7日に残念ながらフィレンツェで91歳の生涯を閉じられた。

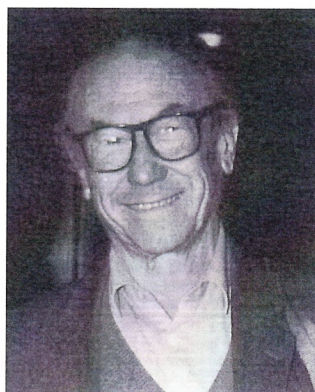
生い立ち

フォスコ・マライーニは1912年11月15日にフィレンツェで、父親は彫刻家のアントニオ・マライーニ、母親は作家のヨイ・クロッスの長男として生まれた。旅行好きな両親のもと、山登りや写真を好み、母の本棚には旅行記や冒険談がたくさん並んでいた。

フォスコは幼い頃に河口慧海著『西藏放浪記』の英訳版“*Three Years in Thibet*”に魅せられ、辺境地、少数民族の国に引き込まれていった。

フィレンツェ大学で人類学を学び、1935年に画家トパーツィア・アッリアータと結婚。

1937年に東洋学者ジュゼッペ・トゥッチー一行のチベット調査隊随行写真家として参加。後に写真集“*Lontano Tibet*”（1937年、邦訳『チベット』）、旅行記“*Dren Giong*”（1939年、邦訳『ヒマラヤの真珠』）を出版している。



[図1] フォスコ・マライーニ

札幌訪問の実現

マライーニは日本の国際学友会外国人研究者奨学金を取得。1938年10月31日にイタリア南部の港町プリンデンを出港し、スエズ運河、インド洋、フィリピン、香港などに停泊、2か月の船旅で12月1日に神戸港に着いた。東京に滞在後、列車と青函連絡船を乗り継いで札幌に到着したのは12月15日午後7時40分、猛吹雪で積雪は1mだった。

『北海タイムス』（現・『北海道新聞』）翌日の朝刊見出しで「憧れのエルム学園で『アイヌ民族』研究マライーニ氏、夫人帯同で来札」の記事があり、駅前で撮影したマライーニ、トパーツィア夫人、娘のダーチャの写真を載せている。

翌日、当時の北海道帝国大学へ行き、今裕学長と面談、学長は医学部で解剖学を教える児玉作左衛門教授に差し向けた。児玉教授はすぐに住居を手配し、

i) 高澤光雄 〒003-0833 北海道札幌市白石区北郷 3-4-1-12

TAKAZAWA Mitsuo. 3-4-1-12 Kitago, Shiroishi-ku, Sapporo, Hokkaido 003-0833



〔図2〕 アイヌのイクパスイと文献。原書は1942年に東京のイタリア文化会館が刊行したもの。1994年に白老のアイヌ民族博物館開館10周年記念として刊行

大学所有の職員住宅に家族と共に入居、大学では教授室近くの部屋を用意してくれた。

当時、兄玉教授はデ・アンジェリスの「蝦夷国の報告書」を翻訳中だった。神父アンジェリスはイタリア人で1618年と1621年の2回蝦夷地を訪れ、布教と調査を行った。1623年に江戸で逮捕され、12月4日に品川札の辻で火刑に処せられた。マライーニは喜んでイタリア古文書の解明に尽力した。

この訳書は、『北方文化研究報告』第4輯、兄玉作左衛門『デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就いて』として、1941年2月に北海道帝国大学北方文化研究室から出版された。

マライーニはこうして3年4か月を大学に通い、教授の指導のもとでアイヌ人類学研究に没頭し、各地のアイヌ部落を訪れることになる。

アイヌ研究の成果

アイヌ民族の研究のため札幌に留学したマライーニだが、当時、北大には文化人類学を扱う学部がなく、医学部解剖学の兄玉教授は日本人とアイヌ人の頭骨比較研究、アイヌ民族文化の起源を探る考古学者だった。マライーニはそこで基礎を学びながら、各地のアイヌ集落を訪れた。

日高管内平取町二風谷に英国人医師で人類学者のネイル・マンローが永住していて、教えられることが多かった。マライーニをアイヌ文化に駆り立てたのは、壮大な叙事詩ユーカラ、イヨマンテに象徴されるアイヌ伝統のダイナミズムだった。

当時、アイヌ民族が祭事に使うイクパスイ（酒ペラ＝鬚揚籠）の研究はあまりされていなかったもので、各地の集落からイクパスイを収集し、同時に各地の

博物館収蔵品を調べ上げた。

イタリア語の論文で書かれた“*Gli iku-bashui degli Ainu*”は、東京のイタリア文化会館から1942年に出版された。日本語訳の出版が望まれ、打ち合わせのためマライーニは1993年4月28日に北海道白老町のアイヌ民族博物館を訪れている。同書の日本語版は、翌年12月1日に出版された（図2）。

アイヌの風俗写真

北大留学中もカメラを携え、訪れたアイヌ集落を撮り続け、今では貴重な写真が残されている。1954年4月にマライーニは屈斜路湖畔で熊祭の映画撮影を行い、詩人でアイヌ文学研究者・更科源蔵の協力を得た（図3）。熊祭は盛大なイヨマンテ〔それを送らしめる＝意識、以下同〕で、家で飼育した小熊の霊を神の国の親元に送る集りである。家の中で厳粛なカムイノミ〔神への祈り〕を済ませ、外のマササン〔幣場〕の前で男も女もウポポ〔まつり歌〕を唄い輪舞する。

熊の首に縄をかけ、檻から出ると花矢で射られる。古老のタツカラ〔舞踏〕が終わると酒宴。翌日はアイヌのコタン〔人間の国〕からカムイコタン〔神の国〕に送る式を行って終了する。

1956年に発行された『北方文化写真シリーズⅡ アイヌの踊』には、マライーニが撮影した「種まき踊—スチョチョイ」がある（図4）。豆まきの動作を真似た踊で、和人の影響を受け、明治年間に十勝、旭川、北見、釧路へと伝わった。

北大山岳部に加わり活躍

北大山岳部『時報』9号（1939年12月発行）に



【図3】「熊祭」1954年（昭和29）4月に更科源蔵が屈斜路湖畔に案内し映像撮影



スチヨチヨイ チヨイナ
イホレイ イホホ
イホレイ オー
イホレイ イホホ

【図4】「種まき踊り」1956年（昭和31）発行の『北方文化写真シリーズ』に掲載

よれば、同年2月15日に札幌グランドホテルで卒業生送別会が催され、その席でマライーニは入部挨拶を行った。5月9日には北大学生ホールで春山報告会があり、マライーニは「北海道の印象及び大雪山」を述べている。

この大雪山登山について、『北大山岳部々報』7号（1941年2月発行）の記録に、「昭和14年3月17日～20日、山岳部員岡彦一、イタリアのマライーニ・F、ドイツのヴィルス・Kの3人が、大雪山で春の粉雪と太陽とをエンジョイして来た。愛山溪温泉から旭岳、永山岳等へ登った。大変面白く雪の上のスポーツに時を忘れた」とある。

北大山岳部のペテガリ岳遭難

この遭難の第一報は、『北海タイムス』昭和15年1月10日朝刊に、「日高山脈札内岳で北大生9名遭難 無残・雪崩に一呑み 引返そうとした一瞬

奇跡・押出された1名」と大見出し、写真入りで載った。概記すると「若きアルピニストの課題として、今なほ人跡未踏と云われる日高山脈の峻峰ペテガリ岳（1763米）の冬山に北大山岳部では数年来冬季踏破を企て未だ成功を見ず。今冬の一行10名が30日午前8時に中札内を出発、意義ある新春を期して踏破すべく難コースを突破、新春5日午後4時頃トムラウシ川合流点からヤオロマップ岳を経てコイボク札内岳頂上付近に達した際大雪崩に遭遇し遂に9名（外1名はキャンプ残留）は埋没したが、そのうち1名が奇跡的に助かった。」

また、12日の朝刊では「ペテガリ岳恨深し 北大マライーニ氏 札内で又遭難か イタリアの若き学徒」の見出し、写真入りで報じている。

この件については、本文の「はじめに」でも紹介したが、1971年に北大山の会編『日高山脈』附録収録の文章でマライーニが思い出を述べている。また、マライーニが下山の途中で坂本直行と出会った経緯については、坂本直行著「マライーニときびだんご」（高津光雄編『はるかなるヒマラヤ』収録）に書かれている。

イグルー（雪小屋）作り発案

ペテガリ遭難の年の1月初め、イタリアの山岳雑誌にフランスのルイ、マラヴィエユ夫妻がモンブラン頂上で1週間イグルーで暮らしたとの記事が載った。また、パーク・スミスの『エスキモー論』では「器用な人は固い雪小屋を1時間以内に作る」と記載されていた。これらに触発されたマライーニは、ペテガリ遭難現場から帰宅後、札幌の自宅で居候していた北大予科生宮澤弘幸とイグルー作りの実験を重ねた。

そして1月27日に手稲山頂上で、ストック、小型スコップ、鋸を使ってイグルーを作り、図入りで報道陣に公開した。昭和15年2月4日と5日の『北海タイムス』朝刊に「冬の山岳征服にエスキモー式“雪小屋”の実験 マライーニ君手稲山頂で成功」の見出しで連載記事が載り、「冬山に挑戦する人たちが最大の悩みとするのはキャンプの搬送でありヒュッテへの無理な行程である。8名の生霊を呑んだペテガリ遭難は雪崩であったがキャンプを運び上げた登山隊の労苦は筆舌に尽きせぬものがあつた。若しも今紹介しようとするエスキモー式雪小屋が利用されていたならば、従来の犠牲者たちは幾多救われていたと思う」と述べた。2月16日には芦別岳、3月10日に十勝岳でも披露している。

マライーニはヨーロッパ・アルプスでの登山経験を生かし、冬の記録のなかった十勝岳から大雪山へ

۲

暮れに札幌を出発。コイカクシュサツナイ岳頂上にイグルーを設営し、1月5日3時25分にイグルーを出発して、ペテガリ岳頂上11時10分、イグルーに帰着したのは18時30分だった。15時間にわたるロング・アタックで念願の初登頂を果たした。

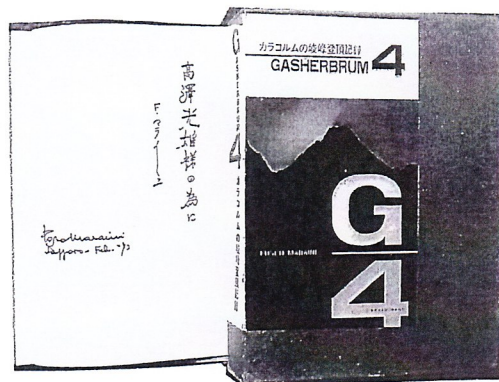
今村はイグルーを作った経験はなかったが、ヒントはマライーニの話で、風の強い国境尾根ではこれに限ると考え実施したものだった。

F・マライーニ『ガッシャブルムⅣ』

1962年12月に牧野文子訳で理論社から『ガッシャブルムⅣ』が刊行された(図6-A・B)。「カラコルムの峻峰登頂記録」380頁、挿入写真106枚の大作である。イタリアのガッシャブルムⅣ隊のF・マライーニ、ガッシャブルム登頂のボナッティら4人が日本AACKチョゴリザ隊のベースキャンプを訪問して、両国がお互いの登頂成功を祝った。この時、日本隊芳賀孝郎隊員が撮影した集合写真が、表紙カバー裏面に掲載されている。



【図6-A】 その時の集合写真を芳賀孝郎隊員が撮影、著書の表紙カバー裏面に掲載された



【図6-B】 1972年(昭和47)札幌丸善のサイン会で『ガッシャブルムⅣ』に署名して頂いた

芳賀孝郎『私のシュプール』

チョゴリザの芳賀孝郎隊員が2016年1月に『私のシュプールⅠ』を出版し、その中で「チョゴリザ登山のこと」を記している。1958年の記録を抜粋すると、「第3キャンプ付近から見えるバルトロ氷河のモレーンとセラックの縞が蛇行して行く巨大な流れと、8000m級の山々が、右よりヒドンピーク(8068m)、ガッシャブルムⅡ(8035m)、同Ⅲ(7925m未登)、同Ⅳ(7980m)、ブロードピーク(8047m)、K2(8611m)と屏風のように連なっているのはまさに壮観である。

〔8月4日〕藤平正夫、平井一正の両隊員が18時間をかけて標高差約1000mのラッシュにより、遂にチョゴリザは登頂されたのである……。

〔8月12日〕イタリア隊の4人が我々のキャンプ地を訪問してくる。山登りをする人間の気持ちは同じである。愉快にお互いの山の苦労を話し合った。

最後にヘルマン・プールの天幕で遺品を発見し持ち帰り、プールの友人であるボナッティに渡した。」

ヘルマン・プールはオーストリアの登山家、カラコルムの巨峰ブロードピークの初登攀者。1957年にカラコルムのチョゴリザ登攀中、不幸にも雪庇が崩れ墜落死した。33歳の若さであった。

私の初めての出会いと、 アイヌ関係書提供

マライーニはペテガリ遭難現場で坂本直行と出会い、交流を深めていた。坂本と私の出会いは、札幌で1957年3月に第1回「坂本直行スケッチ展」が催され、著書を購入しサインをして貰った時である。以来、丸善札幌支店の画廊で絵画展を催し、著書や絵画の販売に携わり世話になっていた。

1967年3月にマライーニはアイヌ本を求めて来札。販売本は少なく、坂本に相談のうえ私の勤務先に来店されたのであった。マライーニは北大医学部児玉教授から教わったと言い、私もまた医学書販売員で児玉教授の世話になり、その傍らアイヌ語の山名を調べていたので教授に教わった。そして、北海道出版刊『北海道の山』に「えぞ山名考」を1962年7月から3回連載した(当時「蝦夷」は常用漢字ではないので、ひらがなで記載)。そんな事

2月4日の『北海タイムス』にて「北の都に“山男の友情” 著書サイン会開く 9、10日札幌丸善 北大同窓の坂本画伯ら仲介」の見出しで報じられた

その後、主要都市の空襲が激化。1945年5月に愛知県豊田市東広瀬町の広済寺に移され本堂西側の

2 間暮らし。監視付きで食糧も不自由だったが、寺の住職も確保に努め、村人も西瓜や野菜などを持ち寄った。終戦を迎えて 9 月に一家は広済寺を離れ、東京へ移り、1946 年 2 月に帰国した。その後、1954 年と 1988 年に広済寺を訪れて交流を深めた。

写真展と歓迎レセプション (1989 年)

豊田市市民会館で 1989 年 7 月 29 日から 8 月 20 日にフォスコ・マライーニ写真展「東洋への道 南イタリア・中央アジア・日本」を開催。7 月 28 日にホテルトヨタキャッスルにて、フォスコを招いて「フォスコ・マライーニさん歓迎レセプション」を催し、多彩な方々が出席した (写真=図 9)。

東京都写真美術館で写真展開催 (2001 年)

イタリア文化会館と朝日新聞社共催。2001 年 11 月 8 日夕刊は「日伊の民族パチリ マライーニ展開

幕。日本におけるイタリア年企画の一つ『フォスコ・マライーニ写真展 イル・ミラモンドーレンズの向こうの世界』が 8 日、東京・目黒区の東京都写真美術館で始まった。第 2 次大戦中の日本に滞在したイタリアの著名な文化人類学者で写真家のマライーニが、日本や南イタリアなどの民族・風土を 60 年かけた O・P・ビッシュウ文庫蔵の約 170 点を展示している。12 月 4 日まで」と伝えている (図 10)。

開催当日、マライーニの写真を集大成した大型本『60 年間のイメージの記録 フォスコ・マライーニ イル・ミラモンドーレンズの向こうの世界』(天地 31cm×左右 24.5cm、359 頁) が出版された。写真説明は日本語で記載されている。

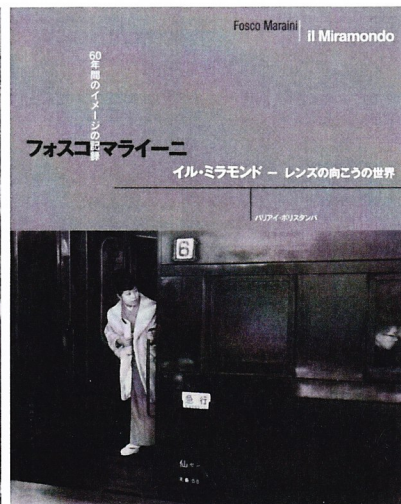
北海道立文学館で写真展開催 (2003 年)

2003 年 4 月 29 日から 6 月 1 日にかけて「フォスコ・マライーニ写真展—東洋への道」が開催された (図



【図 9】 歓迎レセプションの出席者

前列左から、加納俊治 (啓子の夫)、杉本誠 (写真展企画進行)、盛岡まさ子 (京都時代にフォスコの娘の家庭教師、写真展実行委員)、加納啓子 (フォスコの娘と遊び仲間、31 代住職の孫娘)、フォスコ・マライーニ、酒井泰俊 (広済寺住職)、レセプション・パネルの「イ」の下が『フォスコが愛した日本—受難のなかで結ぶ友情』の著者・石戸谷滋、パネル「ん」の下が妻のマライーニ見江子



【図 10】 マライーニ写真展 「イル・ミラモンドーレンズの向こうの世界」 (2001 年、東京)

北海道文学館企画展

フォスコ・マライーニ 写真展

～東洋への道～



2003年4月29日(火)～6月1日(日)

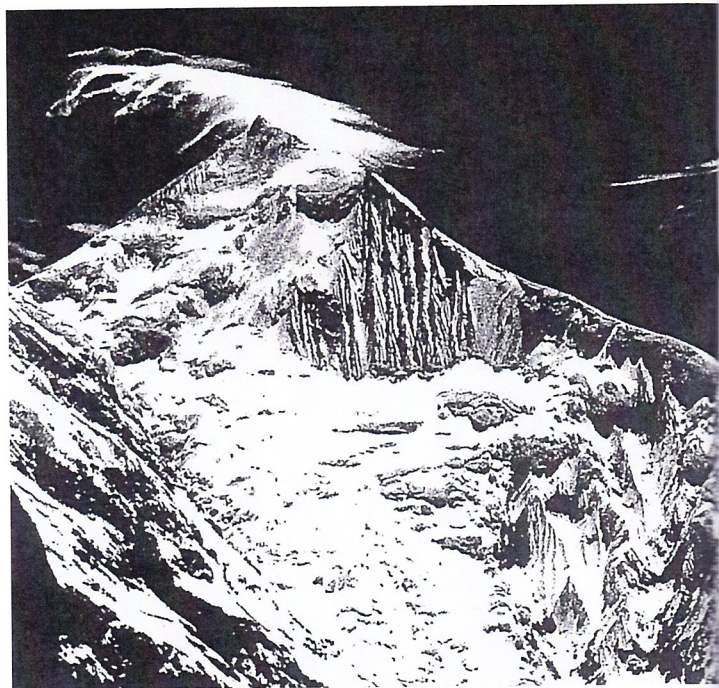
開館時間：午前10時～午後5時(入館は4時30分まで)
休館日：月曜日(5月5日を除く)、5月6日

会場：北海道立文学館特別展示室

観覧料：一般300(250)円、大学生150(100)円、高校生以下と65歳以上無料
※()内は10人以上以上の団体料金

[図11-A] マライーニ写真展(2003年、札幌)

いつもお世話様で感謝しております
私達の時代も含む創部10年後の次の10年
は80周年の経途の中で最も変革の時代
でした。即ち遭難死者、日支事変、第二次
大戦で先輩同僚の戦死者の多数出ている
事、社会環境、登山環境の悪化の時代では
ないか。『代山岳部長の中で、いろいろの面で
最も傑出し著明な山岳人の秀さんが10年の
奉命在任した中でこの時代でした』
唯一の明るいことは10年東部の命題
をいれた事でしようか。昨年の山岳会
総会出席者名簿の中で私と最も若い人とは
入部が60年の差がありました(各時代の入部
年代順でその時代が書いてありました) 戦争中
小さい子供時代、戦後生まれもあり、時代が風
化しつつある事は当然です。90年の私から貴方
資料のあせ治になり下す何かを感じあまじい
と思っています。

[図11-C] 写真展の開催時に、筆者宛に届いた
マライーニ自筆の謝礼メモ[図11-B] マライーニの展示作品
チョゴリザ(7654m) カラコルム 1958年[図12] 墓の揮毫写真
(広済寺、酒井泰俊住職より)

11-A)。主催：北海道立文学館、協力：豊田市美術館・水越武ほか、後援：イタリア文化会館・日本山岳会北海道支部・北大山の会・北海道ウタリ協会ほか4団体。

豊田市と豊田市美術館の全面的な協力を得て、札幌でもマライーニ展開催の機会を得た。アイヌ民族の生活を記録した貴重な写真、マライーニがたどった南イタリア、チベット、カラコルム、ヒンドウ・クシなどの、自然や人々の暮らしを捕らえた代表作である。豊田市美術館所蔵251点の中から約150点を移動、アイヌ関係は29点含まれている。

壁面の写真展示とは別にショーケース1基3段に、筆者がマライーニから頂いた『日本スキー場案内』、

「イタリアの山の本」、日本山岳会『山岳』抜刷、イタリア国旗デザインのネクタイピン、イタリアからの切手付き封筒、『ガッシャブルムIV』署名本、それにマライーニの提案により作成した「富岡鉄斎蝦夷屏風」ミニ版などを飾った。

開期中にマライーニ自筆礼状(図11-C)が「フォスコ・マライーニ写真展 東洋への道」の葉と共に送られてきた。文中、北大山岳部80周年回顧で「山岳人の秀さん」とあるのは伊藤秀五郎で、山岳部長を1940年から5年間務められた。時代の風化をよく捉えている。

遺言で第二の墓を広済寺に設置

墓は当人の希望として全骨を当山に納めてほしいとのことだったが、子供達の相談の結果、遺髪と爪の一部を納めることになる。墓のスタイルは本国同様のものを作成し、妻のマラーニニ見江子(妻トパーツィアとは1955年に離婚、1968年に並木見江子と再婚)が設計図を提供。メッセージは日本語に翻訳し、文字は長女ダーチャと遊んだ当時の住職孫娘啓子の夫・加納俊治が揮毫。戒名「普光院萬来伊日居士」(ふこういんまらいにこじ)。

マラーニニ蔵書はヴィエッセウ図書館に移設

マラーニニは日本関係の膨大な図書を収集していた。『北海道新聞』1985年4月16日夕刊にアイヌ関係書棚前のマラーニニの写真が載り、記事は大きな見出しで「フィレンツェより情熱を込めて、日本文献図書館を建てたい。研究のトリデに」と自宅住所を添え、寄贈本の協力と呼びかけた。

広大な敷地中央部に建てられた住居は、一步入ると玄関から本の山。2階の書斎は窓以外の三方が天井まで届く書棚に囲まれ、そのうち約1万冊が日本関係でアイヌ関係は約4百冊。図書館づくりを強く望んでいるのは、フィレンツェには日本を含め東洋関係の研究機関がないので、自由に日本文献を閲覧出来る日が来る事を願っている——と報じられた。

その結末は、没後フィレンツェのストロツツイ宮殿内、ヴィエッセウ図書館マラーニニ図書室に約8千冊、写真室には7万枚に及ぶ写真が移設された。

イタリア文化会館がマラーニニ賞創設

2013年に東京・イタリア文化会館が創設した「フォスコ・マラーニニ賞」は、日本語によるイタリアについての優れた著作を対象とする。第1回は、同年11月に水野千依『イメージの地層—ルネサンスの図像文化における奇跡・分身・予言』が受賞した。第2回は2014年発行の池上俊一著『公共善の彼方に—後期中世シエナの社会』が受賞している。

抑留イタリア人を映画に

フォスコの孫娘ムージャ・マラーニニは、2015年10月に映画監督として初来日した。19日に祖父の遺髪が納められている広済寺の墓を訪れ、そこで当時の住職孫娘、加納啓子と対面し、2人は抱き合って喜び

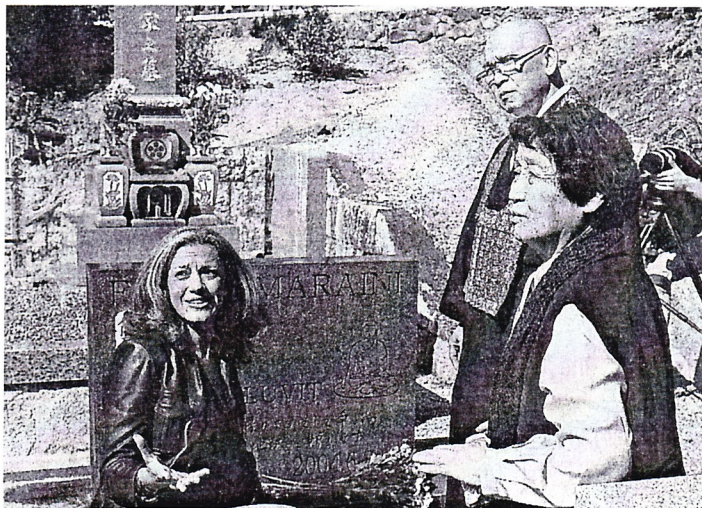
涙を流した(図13)。

来日の目的は、祖父母らの抑留体験に関するドキュメンタリー映画製作であった。ムージャは祖母トパーツィアの日記に衝撃を受け、家族だけの物語ではなく、多くの人に伝えたいと撮影に取り組んでいた。日記は一文ずつ俳句のような短文なので思いを込め、題名は「梅の木の俳句」とした。完成は2016年春である。

編注——2017年3月9日、ローマにあるイタリア日本文化会館において、ムージャ・マラーニニ・メレイ監督によるドキュメンタリー映画「Haiku on a Plum Tree」(梅の木の俳句)の上映会が開催された。その後、10月16日に一般公開されているが、日本での公開予定は不明。インターネットで紹介用の映像が観られる。

日本語訳の著書

- ・ヒマラヤの真珠、精華房、1943
- ・チベット—そこに秘められたもの、理論社、1958
- ・ガッシャブルム4—カラコルム峰登頂記録、理論社、1962
- ・海女の島—舳倉島、未来社、1989
- ・フォスコ マラーニニ写真展—東洋への道、フォスコ マラーニニ写真展実行委員会、1989
- ・アイヌのイクパスイ、アイヌ民族博物館、1994
- ・60年間のイメージの記録 フォスコマラーニニイル・ミラモンドーレンズの向こうの世界、パリアイ・ボリススタンプ、2001
- ・随筆日本—イタリア人の見た昭和の日本、松籟社、2009



【図13】墓の前にて 左からムージャ・マラーニニ、酒井泰俊住職、加納啓子

おわりに

マライーニは戦時中は日本に滞在、抑留生活の苦難の道を歩んだ。北大生の宮澤弘幸とはイグルー作りから懇意だったが、国際秘密法のスパイ冤罪で逮捕され刑務所へ。これらは多くの著作があるので紙面の都合で割愛した。

今回の研究ノートを纏めるに際し、ペテガリ岳冬季登山者今村昌耕、山岳写真家水越武、日本山岳会元副会長芳賀孝郎、北大山岳館中村晴彦、北海道史研究協議会会員出村文理、NHK函館放送局庄司清彦、広済寺酒井泰俊住職、北海道新聞社電子メディア局、日本山岳会図書室、そして東京のイタリア文化会館から資料の提供を受け、感謝申し上げる次第である。

(文中敬称略)

【参考文献】

- 更科源蔵：熊祭 北方文化写真シリーズⅠ、楡書房、1955.8
- 河野広道：アイヌの踊 北方文化写真シリーズⅡ、楡書房、1956.1
- 加藤泰安：チョゴリザ登頂（1958年）、山岳、54年、日本山岳会、1960.3
- フォスコ・マライーニ（牧野文子訳）：ガッシュブルム 4—カラコルムの峻峰登頂記録、理論社、1962.12
- フォスコ・マライーニ：ペテガリ岳の思い出、今村昌耕：ペテガリ岳初登頂の思い出、(北大山の会編) 日高山脈 附録、茗溪堂、1971.5
- フォスコ・マライーニ：日本文献の図書館を建てたい フィレンツェより情熱を込めて、北海道新聞、1985年4月16日夕刊
- 上田誠吉：ある北大生の受難—国家秘密法の爪痕、朝日新聞社、1987
- 上田誠吉：人間の絆を求め—国家秘密法の周辺、花伝社、1988.7
- 石戸谷滋：フォスコの愛した日本—受難のなかで結ぶ友情、風媒社、1989.6
- フォスコ・マライーニの世界、広報とよた、752、愛知県豊田市、1989.7
- フォスコ・マライーニ（松溪裕子訳）：山岳写真について—むずかしいものなのか、やさしいものなのか？、山岳、84年、日本山岳会、1989.12
- 杉本誠：写真を通して見るフォスコ・マライーニの世界、山岳、84年、日本山岳会、1989.12
- F・マライーニ：昭和10年代の二風谷—アイヌ研究の回想、アイヌ学の夜明け、小学館、1994.2
- フォスコ・マライーニ（ロレーナー・ステンダールディ訳）：アイヌのイクスパイ、アイヌ民族博物館（北海道白老町）、1994.12
- フォスコ・マライーニ：私の恩師 児玉作左衛門教授の思い出、児玉作左衛門先生生誕百年記念誌、北大医学部解剖学第2講座、1997.2
- 高澤光雄：ペテガリ岳遭難でイグルーを実用化した北の登山者たち、山岳文化、2、日本山岳文化学会、2004.4
- 高澤光雄：名誉会員フォスコ・マライーニ氏を悼む、ヌプリ、35、日本山岳会北海道支部、2005.4
- 高澤光雄：F・マライーニ—山と人と本16、譚、18、二水会、2005.4
- 谷泰：追悼 フォスコ・マライーニ氏、山岳、100年、日本山岳会、2005.12
- 高澤光雄：イグルーの普及と実践的登山、山の仲間と五十年、秀岳荘、2005.4
- 高澤光雄：日高山脈を描き続け ペテガリ岳遭難で活躍した坂本直行、山書月報、530、日本山書の会、2007.3
- 今村昌耕：フォスコ・マライーニ氏とペテガリ遭難の“秘話”—其の時代、会報、100、北大山の会、2007.6
- フォスコ・マライーニ（岡田温司監訳）：随筆 日本—イタリア人の見た昭和の日本、松籟社、2004.11
- 坂本直行：マライーニときびだんご、(高澤光雄編) はるかなるヒマラヤ、北海道出版企画センター、2011.7
- 北大生の宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の事実を拡める会、花伝社、2014.9
- 望月紀子：ダーチャと日本の強制収容所、未来社、2015.9
- 芳賀孝郎：チョゴリザ登山のこと、私のシュプールⅠ、自費出版、2016.1
- 小坂洋右：消えた外国人 戦時の抑留、北海道新聞、2016年8月11日～15日朝刊